

変わらない 夏の日が つなぐ みんなの絆

川内町町内対抗野球大会

お盆の帰省でたくさんさんのひとが久しぶりの再会を喜ぶ8月13日。川内では、決まって「町内対抗野球大会」が開催されます。今年で開催62回目。実に、60年以上も間変わることなく続いているこの大会は、年齢の枠を超えるたくさんのお出場者で賑わい、地区をあげての応援に熱が入ります。

田野沢地区にお住まいの川端貞志さん78歳。根っからの野球人でお宅は、息子、孫、ひ孫までが野球でつながっています。

「自分には野球しかないっていう野球が好きで、川内で野球の試合があるっていうと、用事を投げ出しても見に行くくらい。孫もひ孫も野球をやってくれて、うれしいよ。8月13日は毎年たくさん人が集まってみんなで野球をやつてね、あれはいいよ！応援も地区をあげてみんなで。毎年お盆が楽しみなんだ。」

実は貞志さん、この大会に毎年選手として出場し、必ず1回は投手を務めてきたんだそうです。お



8月13日に開催された町内対抗野球大会。地区のみんながそろうって白球の行方を見守る。

じいちゃんとともに試合に出場する孫の裕太郎さんと裕孝さんと言います。「今年年齢を感じさせずに投げるおじいちゃん。その元気を受けとめる気持ちでボールを受けましたね。」



優馬くんとのキャッチボール。心も身体もつながる大切な時間。



川端貞志さん 孫 優馬くん

とにかく野球を愛してやまない貞志さん。いつもの優馬くんとのキャッチボールを取材させていただきたいとのお願いに、往年のユニフォーム姿で登場してくれた。



若者を見守る貞志さんだが、実は自分も選手として出場。



「野球は人生」と笑顔。



野球大会では家族が勢揃い。右から孫の裕太郎さん、ひ孫の優馬くん（裕太郎さんの長男）、貞志さん、孫の裕孝さん。

指導方法を勉強し、理論的に野球を楽しんでいるといえます。

貞志さんと毎日のようにキャッチボールを楽しむひ孫の優馬くんは「一緒に野球ができて楽しい。いろいろ教えてくれるんだよ。」とにっこり。まさに、親子4世代が大好きな野球を通して家族の絆を深めているのです。

きつと来年も変わらず開催される町内対抗野球大会。家族で、そして地域の仲間と野球に汗を流し、お互いがつながっていることを実感する夏の日が、川内の明日をつなぎます。

創りあげた伝統を 次の世代につなげたい

かわうちひば工房



織り機で少しずつ織っていく作業は全身を使う。5mほど織るのにおよそ1週間を要するという丁寧な仕事だ。



取材に応じてくださったかわうちひば工房のみなさん。前列右から大山松子さん、船橋紀子さん、後列右から山崎禮子さん、大室和圭子さん、鎌田深雪さん。



ひば織りのテーブルクロス。天然の色合いは、置く場所を選ばない。



大山さんの旧家。古民家の一室で活動は続けられる



バッグ、スリッパ、名刺入れからストラップまで、手作りの商品がそろそろ。どれもひばの香りと質感を感じるすばらしい作品。

かわうちひば工房 むつ市川内町川内 380

「ヒバの木を薄く挽いて、水で柔らかくして織っていくんです。なかなか出会えない、川内ならではの逸品ですよ。実際、ひば織りを用いた製品について、時折京都など遠方からも問い合わせが入ったりするんです。」

現在、大山さんは現役を引退。築きあげた技術は、次の世代が受け継いでいます。

「途絶えさせたくない、と頑張っているんですけど。もって若い方にも引き継いでほしいですね。このまちにこういうものがあって、こういうものを作れるんだと知って、興味を持ってほしい。ひば織りのことを知れば、きつと、実はこういう手作りのものに興味のある子はいらなさんの気持ちにただひとつ「せつかく創りあげた素晴らしい技術を後世に残したい」ということ。

こんなエピソードも。偶然か必然か、ひば織りが遠くフランスで活躍する日本人デザイナーの目にとまり、注文をいただいて、おしゃれなデザインのマットを作ったフランスへ納品したことがあったそうです。「私達の想像もつかないようなところで認められた。そういう強みを活かせば、若い世代にも受け入れられるのではないかな。」

いつでも、誰でも、ふらっと立ち寄っていただいてかまわないというかわうちひば工房のみなさん。興味のある方はぜひ工房を覗いてみてはいかがでしょうか。



「残していきたいもの、それを大事にしていく姿勢が大切ね」と大山さん